

グイ語における姿勢動詞の文法化

大野 仁美

キーワード： 姿勢動詞・アスペクト・意味拡張・コイサン

要旨

グイ語（コエ語族・西カラハリコエ）の姿勢動詞‘stand’・‘lie’を起源とするアスペクトマーカ―が三種類の意味拡張を経て形成されていることを、それぞれの意味を確認しながら提示する。

1. はじめに

1.1 姿勢動詞の文法化

人間は常になんらかの姿勢・体勢をとっており、主語のそれを表す動詞を「姿勢動詞」と呼ぶ。その基本的なものは、座姿勢・立姿勢・横臥姿勢（「座る」・「立つ」・「横になる」）をあらわすものである (Newman 2002)。個別言語においてこれらの姿勢を表す動詞は、自動詞・他動詞・動作動詞・状態動詞の一部であったり一群であったり（たとえば、「立つ・立てる・立ち上がる・立っている」等）さまざまなので、本稿ではその個別の語の差異は問わず、その一群に共有される「姿勢」の概念をそれぞれ‘sit’・‘stand’・‘lie’と表すことにする。

姿勢動詞はしばしば意味拡張し物の所在や存在を表すことがある。まず、主語が人間だけでなく動物、さらには無生物にまで拡大される。生物が移動しておらずある位置に留まっている時は一定の姿勢を保っているの、そこに注目してその所在を表すためにも用いられるのだが、自分で体勢をかえることができない無生物までも、その物体の形状やそれがどのように空間を占めているのかを示すのに用いられるのである。それがさらには「姿勢」の意味を失って、ただ存在をあらわす動詞として用いられることもある。

(1) The dog/cat is siting under the tree. (Newman 2002: 7, (4a))

(2) The computer sits on the desk. (Newman 2002: 7, (5a)の一部略)

(3) Our family photo stands on the piano in our house. (Newman 2002: 8, (7a)の一部略)

(4) The mattress is lying on the floor. (Newman 2002: 9, (9b))

この所在動詞への文法化を経て(Kuteva 1999)、姿勢動詞がさらに時制・アスペクトを表す要素（多くは進行・継続・反復・習慣などの imperfective の下位群）のソースになることが通言語的に広く知られている (Bybee et al. 1994; Heine et al. 1993)。生物がある

体勢をとってなにかにとりくんでいることを表す表現から、所在を表す機能を経て、動詞としての機能を徐々に失い、本来の「姿勢」の意味も失って、文法的アスペクトを表す要素へと以下のように文法化する。

posture ⇒ locative/existential ⇒ aspectual

例えば、以下のオランダ語の例(5)は「立った状態で待っている」ことを意味するが、例(6)「私たちのチームはだらだらとホッケーをやっていた」においては立姿勢の意味はない。

(5) オランダ語

Ik stond te wachten. (Lemmens 2005: 184, (2)一部略)

I stood to wait ‘I was (standing and) wait’

(6)

Onze ploeg stond lamlendig te hockeyen. (Lemmens (2005: 185, (3b))

our team stood sluggishly to hockey ‘Our team was playing hockey sluggishly

このように姿勢動詞を起源とするアスペクトマーカは、言語によって、また文法化の度合いによって、姿勢の意味が残って多義になっていたり、完全に漂白されていたりする。

1.2 ギイ語のアスペクト体系

ギイ語(コエ語族・西カラハリコエグループ)のアスペクト体系は、従来報告されていたもの(cf. Vossen 2013)とは大きく異なることが近年明らかにされてきている(Nakagawa 2016)。その概要は、カラハリ言語帯における系統をこえた地域特徴(Güldemann 2006)として特定されている「アスペクトマーカがある場合は *imperfective* を、無い場合は *perfective* を」示すという構造を共有するが、8つもの破格の数のアスペクトマーカを有する体系だというものである。アスペクトマーカは、主に姿勢動詞を起源として形成されており、姿勢動詞の意味が漂白され音形も縮約された文法化の終了したものに加えて、それらを組み合わせたり、姿勢動詞をそれを起源とするアスペクトマーカに重ねて「姿勢」の意味を持たせたもの、さらにその重ねた形の「姿勢」の意味をなくしたものが共存している(Nakagawa 2016)。

このように、構造・体系の全容は把握できるようになったが、それぞれのマーカがどのように意味的に対立し実際に使い分けられているのかについては、まだ引き続き調査分析が必要である。本稿では、その中間報告として、それぞれのマーカの表す意味の範囲を提示するとともに、姿勢動詞をソースとするマーカの意味拡張がどのようになされているかを考察する。

2. ギイ語のアスペクトマーカ

ギイ語では、時制とアスペクトは融合しておらず、それぞれ小詞の一群を形成してい

る。時制は時制を表す小詞（以下時制マーカーと呼ぶ）の存在によって特定される（遠過去・昨日過去・昨夜過去・今日過去・今日未来・明日未来・遠未来に無標の場合は「現在」）。アスペクトは、(1) 時制マーカーの後にアスペクトを表す小詞（以下アスペクトマーカーと呼ぶ）がある場合は *imperfective*、(2) 動詞に接続する *perfect* ‘-*ha*’ ((1)と(2)は共起しないので、*perfect* はアスペクトの1種とみなす)、(3) どちらも無い場合は *perfective*、のいずれかで決定される。時制辞区分は8（時制マーカー7＋無標）、*imperfective* としてまとめられるアスペクトマーカー (*progressive*, *habitual* など)は8という、非常に細分化された分析的な体系である。このうち、本稿が扱うのは、以下の網かけでしめしたアスペクトスロットに生起するマーカーである。

(tense) (aspect) 動詞((接続形)-*perfect*)

グイ語の姿勢動詞‘*stand*’・‘*lie*’・‘*sit*’のうちアスペクトマーカーへと文法化したのは、‘*stand*’と‘*lie*’の2つである。通言語的にもっとも頻繁に文法化されている‘*sit*’(Maisak 2005)は文法化されておらず、後でみるように、グイ語の「座った状態で～している」というアスペクトマーカーは場所を表す後置詞を起源とする(Nakagawa 2016)。

‘*stand*’ *ciì* / *cié* 「立つ／立っている」 ⇒ *ci*
 ‘*lie*’ *lùì* / *lóé* 「横になる／横になっている」 ⇒ *lò*
 ‘*sit*’ *ŋtùì* / *ŋtúú* 「座る／座っている」

Nakagawa(2016)によるグイ語のアスペクトマーカーの一覧を表1に示す。「進行 *progressive*」が5つあるため、それぞれの対立を明確にする意味素性として動作に付随する「移動[motion]」・「姿勢[posture]」をたてて分析している。(A1)~(A8)のうち、‘*stand*’・‘*lie*’が起源とされるものを下線で示す。8つのアスペクトマーカーのうち6つに姿勢動詞が用いられている。

表1. グイ語のアスペクトマーカー

	アスペクトマーカー	意味素性		
A1	<u><i>ci</i></u>	[<i>imperfective</i>]		
A2	<u><i>lò</i></u>	[<i>abilitive-habitual</i>]		
A3	<u><i>lò-ci</i></u>	[<i>habitual</i>]		
A4	<i>hā-ci</i>	[<i>progressive</i>]	[- Accompanied M/P]	[ϕ mobile][ϕ posture]
A5	<i>kùà</i>		[+ Accompanied M/P]	[+ mobile][- posture]
A6	<u><i>ciìci</i></u>		[+ Accompanied M/P]	[- mobile][stand]
A7	<u><i>lùìlò</i></u>		[+ Accompanied M/P]	[- mobile][lie]
A8	<i>wà</i>		[+ Accompanied M/P]	[- mobile][sit]

(Nakagawa 2016: 123, Table 1 を元にして本文の内容を元に再構成)

以下、「彼らは歌を歌う」という意味のフレーム(7)の下線で示した空所に、表1のアス

ペクトマーカ―(A1)~(A8)を挿入した例文を(8)~(15)に示す。

- (7) ʔàri ___ líĩ= sà ɲlǎè.¹
彼らが 歌を 歌う
- (8) ʔàri ci líĩ=sà ɲlǎè. (A1) 「彼らは歌を(いつも)歌う」
- (9) ʔàri lò líĩ= sà ɲlǎè. (A2) 「彼らは歌を歌う(能力がある)」
- (10) ʔàri lò-ci líĩ= sà ɲlǎè. (A3) 「彼らは(よく)歌を歌っている」
- (11) ʔàri hā-ci líĩ=sà ɲlǎè. (A4) 「彼らは歌を(ずっと)歌い続けている」
- (12) ʔàri kùà líĩ=sà ɲlǎè. (A5) 「彼らは(移動しながら)歌を歌っている」
- (13) ʔàri cĩci líĩ=sà ɲlǎè. (A6) 「彼らは(立った姿勢で)歌を歌っている」
- (14) ʔàri lùlù líĩ=sà ɲlǎè. (A7) 「彼らは(横になって)歌を歌っている」
- (15) ʔàri wà líĩ=sà ɲlǎè. (A8) 「彼らは(座って)歌を歌っている」

以下、これらのアスペクトマーカ―を、1つの形態素からなる単純形、単純形の組み合わせからなる複合形、姿勢動詞が2回重なってできている二重形にわけて、順にみてゆく。

2.1 単独形・複合形

グイ語のアスペクトマーカ―のうち、1つの形態素で形成されているものは、先に見た(A1)・(A2)と、(A5)・(A8)である。(A8)は場所(「~(の中)で/に」)の後置詞が起源で、(A5)の起源は不明である²。

(A1)の *ci* はグイ語のアスペクトマーカ―の中でもっとも意味が中立的で、動作が習慣としてくりかえされること・ある動作が継続されていること・ある動作が開始直後であることなどを意味する。動作が開始されているが終わってはいないことを広く表すというこの特徴の為に、アスペクトマーカ―すべてが *imperfective* マーカ―であるにも関わらず、(A1)の意味素性を Nakagawa(2016)は総称的なものという意味で [*imperfective*] としている。

(A2)の *lò* は、その動作をする能力があること・その動作のやり方を知っていることなどを意味する。例(8)と(9)は共に、「彼らは習慣的に歌を歌う」という意味であるが、その違いは、(A1)を用いた例(8)は、実際に習慣的に歌を歌っているということの意味するのに対し、(A2)を用いた例(9)は、彼らは歌の歌い方がわかっている、歌を歌うことができる状態にある、ということの意味しているのであって、実際には今は歌っていない

¹ フレームとして利用した(7)は、アスペクトマーカ―だけでなく時制マーカ―もないが、グイ語では適格な文である。

² 系統的に近い言語であるガナ語やツイラ語では、(A5)の *kùà* がグイ語の *ci* のような、一般的・中立的な *imperfective* のアスペクトマーカ―のような用いられ方をする。またグイ語でも話者によってはそのような用い方がされることがある。グイ語の *kùà* は、これらの言語からの借用であったり、あるいはその使用法に影響を受けている可能性がある。

場合もあるということだ（たとえば歌う仕事を最近していない歌手など）。

この違いが語用論的によりはっきり示される例を、(A3)との対照を通して見てみよう。(A3)と(A4)は2つの形態素から形成されたアスペクトマーカで、2つめの要素はいずれも(A1)の *ci* である。これらを複合形と呼ぶことにする。(A3)も(A1)・(A2)と同様に習慣を表す。

(16) $\eta\dot{\imath}$ kuuku=si *ci* $\#?ub\dot{\imath}$ =dzi *l\ddot{a}m*. 「この雌鳥は卵を（いつも）生む」
この 雌鳥 A1 卵 産む

(17) $\eta\dot{\imath}$ kuuku=si *l\ddot{o}* $\#?ub\dot{\imath}$ =dzi *l\ddot{a}m*. 「この雌鳥は成鳥である」(A2)

(18) $\eta\dot{\imath}$ kuuku=si *l\ddot{o}*-*ci* $\#?ub\dot{\imath}$ =dzi *l\ddot{a}m*. 「この雌鳥は頻繁に卵を生む」(A3)

(16)は、この雌鳥が実際に卵を生んでいるということの意味する。一方、(17)はそれが生む能力があること、すなわち成鳥であることを意味する。これは、「成鳥であるか否か」を問われた場合の解答としては妥当であるが、この雌鳥について述べた文である場合は、成鳥であるが卵を生むかどうかわからない、まだ卵を生んだことがないような場合に用いられ、むしろ「産まない」ことを含意しうる。つまり前者は実際にその動詞で示される動作がなされていることを示すのに対し、後者は潜在的にその動作が実現可能であることを示すのである。このように、1回もなされていない、あるいは開始もされていない動作を表しうるのは(A2)のみである。

例(18)の(A3)は、(A1)と(A2)のアスペクトマーカが組み合わさって形成されている。グイ語の時制・アスペクトマーカの位置は、時制マーカがアスペクトマーカより前の位置にありさえるなら、この2つは離れて生起できるが、複合形の2つの要素に独立性はなく、(A3)のこの2つの要素が分離して、間に他の要素を介入させることはできない。したがって、これらは形態素2つからなる1つの語彙であるとみなす³。

習慣といっても、(16)と比べると(18)は、通常期待されるよりも頻繁にその動作が行われているということの意味する。たとえば(16)が通常期待される範囲内で「いつも」卵を生んでいる（たとえば2日に1回）としたら、(18)はそれを上回るペースで生んでいる（たとえば毎日）ことを言い、この場合は発話意図としては賞賛に近い。

確認しておく、(A1)~(A3)が習慣の意味で、たとえば、「いつもどこで砂糖買ってるの？」という習慣を問う質問文で用いられる場合、(A1)を使えば通常のサイクル、つまり「砂糖がなくなったらいつもどこで買ってるの？」という意味に、(A2)を使えば「お金があって買える状態のときは」という意味になる⁴。(A3)を使えば「通常のサイクルよりも頻繁に、しょっちゅう」という意味になるが、ここには賞賛の含意はない。

³ もし(A3)の意味を *compositional* にとらえるなら、この雌鳥は「成鳥」で卵を実際に生んでいるという意味になるが、そしてこの例においてはそれは論理的に成立するが、実際には、卵を生む鳥が成鳥であることは当然なので、その解釈は(16)と(18)の意味的な差を考える上では貢献するところがあまりない。

⁴ さらに加えて「長い期間に渡って」「1カ所で」等の意味も含意されることがある。

(A4)は、*hā* (ソースは存在動詞 *háã* と考えられる) と(A1) *ci* の複合で形成されたもので、進行をあらわす。(A4)~(A8)はすべて進行を表すが、(A4)が中立的な進行を表すのに対し、(A5)~(A8)はそれに付随する「移動しているかどうか([±motion])、していない場合はどんな姿勢をとっているか([±posture])」という意味素性(表1の「Accompanied M/P」)が加わって、それによってそれぞれが対立し、語彙化していると分析される(Nakagawa 2016)。この、付随して動き(motion)・姿勢(posture)が伴っているかどうかという素性について、(A4)が中立というのは、そういうものが付随していてもいなくても使用可能ということである。

一方で、(A5)の *kùà* は動作の進行に付随して「移動・運動」が伴う動作をおこなっていることを示す⁵。歩きながら歌を歌っている、ゴミをひろいながら前に進んでいる、などはこのアスペクトでマークされる典型的な例である。さらに、この *kùà* は、主語が身体全体で移動する場合だけでなく、その身体の一部が動いている場合にも(たとえば首をひねって振り返っている最中、腕を上にもちあげている最中など)、また動作の開始や終了などの局面にさしかかる動きを表すのにも用いられる。

以下の例(19)で *kùà* が用いられているが、この文は主語が歩き回って本を読んでいるのではなく、それまで長く続けていた読書という動作が終了にむかっていることを表している。

- (19) *cirè kùà buuka=sà bàrà=sà lòō-kà-χō ?àbi jā àà.*
 私が A5 本を 読むことを 終える 彼が 接続詞 来る
 「私が本をちょうど読み終わったときに彼がやってきた」

例(19)から、「終える」を除く文にすると、今度はその動作を開始しようとしている意味になる。

- (20) *cirè kùà buuka=sà bàrà ?àbi jā àà.*
 私が A5 本を 読む 彼が 接続詞 来る
 「私がちょうど本を読み始めようとしていたら彼がやってきた」

確認の為に、(A1)~(A4)・(A8)のアスペクトマーカを入れた場合および無標(=perfective)の場合の例を以下にあげる。(A1)を使った例は、調査前は先の例(20)の意味になると予測したのだが、これは不適格であった。(頻繁におこなわれる)習慣を表す(A3)も使用不可なので、これらはこの1回のできごとの背景として習慣の表現が適さないためだと思われる。一方で、先に見た「(顕在化していないこともある)(身につけた)能力・生まれ持った資質・慣習」を表す(A2)はこの例には使用可能で、これは「毎日読んでいる時間に(実際に読んでいるかどうかは問題ではなく、潜在的にそれが実現していることになっている時間に)彼がやって来た」という意味になる。

⁵ グイ語と一部言語共同体を形成しているガナ語やツェラ語では、*kùà* はより一般的な imperfective として用いられており、グイ語の *ci* に近い。グイ語の話者でも方言によってはそのような使われ方をしている。

(A4)~(A8)の進行のアスペクトマーカ―は、「彼がやってきた」という出来事の背景になっているので、すべて適格である。また、アスペクトマーカ―がない(26)は、perfectiveの解釈になるので、「読む」という動作を終えてから出来事が起こった、という意味になる。

- (21) *cìrè cì buuka=sà bàrà ?àbì jā àà. (A1)
 (22) cìrè lò buuka=sà bàrà ?àbì jā àà. (A2) 「私が毎日本を読んでいる時間に～」
 (23) *cìrè lò-cì buuka=sà bàrà ?àbì jā àà. (A3)
 (24) cìrè hā-cì buuka=sà bàrà ?àbì jā àà. (A4) 「私が本を読んでいると～」
 (25) cìrè wà buuka=sà bàrà ?àbì jā àà. (A8) 「私が座って本を読んでいると～」
 (26) cìrè buuka=sà bàrà ?àbì jā àà. (無標) 「私が本を読んでから～」

2.2 二重形

この節では二重形をみてゆく。本稿では、同じ姿勢動詞が起源になっている要素が重なって形成されているアスペクトマーカ―を、通常の重複形と区別するために便宜的に「二重形」と呼ぶ。以下、2.2.1では「姿勢」の意味をもつものを、2.2.2では姿勢の意味が拡張されているものを扱う。

2.2.1 二重形[+progressive][+posture]

二重形は以下の2つ、それぞれ表1の(A6)と(A7)である。いずれも先に見た(A5) *kùà*と異なり、付随して移動はしていない；静止して・留まっている状態で何か動作をしているのだが、その際にとっている姿勢が二重形で表される。

- A6 ‘stand’ + ‘stand’ *cìcì* 「立った姿勢で～している」
 A7 ‘lie’ + ‘lie’ *lùlù* 「横たわった姿勢で～している」

これらは、姿勢動詞を起源としない(A8)「座った姿勢で～する」と共に、(A4)の中立の進行アスペクトを用いて言い換えることができる。先の例(14)を(A8)を用いて言い換えると(27)のようになる。

- (14) ?àri lùlù lí=sà ɲlǎè. 「彼らは横になって歌を歌っている」
 (27) ?àri lù-na jā hā-cì lí=sà ɲlǎè.
 彼ら 横になった状態 接続詞 A4 歌を 歌う

(A6)・(A7)共に、前部要素は姿勢動詞と同じ形、後部要素はその姿勢動詞を起源とするアスペクトマーカ―と同じ形であるが、連結して1つの語彙を形成しているとみなす。その理由は、以下の3つである。

- 1) 通常の動詞とアスペクトマーカ―であれば、アスペクトマーカ―は動詞の前に置かれるが、これらにおいては後置されている。
- 2) 前部要素と後部要素を分離して、間に他の要素を入れることができない。両者は一体化していて、他のアスペクトマーカ―と同じ位置に生起する。

- 3) 通常の動詞+アスペクトマーカであるとした場合意味が解釈できない。それぞれ「立っている動作をいつもする(?)」「座る動作をする(能力がある)(?)」等の意味をなさないものになる。

(A6)と(A7)は姿勢の意味をもつので、前部要素は姿勢動詞だと考えることはできる；しかし後部要素は、それが単独のアスペクトマーカである場合にもつような意味を持っていない。このため、二重形の形成は、単独形のアスペクトマーカが文法化された後にさらに進行をあらわすものへと変化して起こったか、あるいはアスペクトマーカの文法化とは別に形成された可能性がある。

この2つの二重形は、先にみたように、[progressive]+[posture]の意味を持つ、つまり、姿勢動詞を起源とするアスペクトマーカが失った本来の姿勢の意味をもっているのが最大の特徴である。姿勢の意味を漂白せず、アスペクト要素に文法化した後も両者の機能を1つの形態に持たせたり、また上の言い換えの例でみたように姿勢動詞とアスペクト要素を伴った動詞を共起させて用いたりすることは可能であるが、グイ語では[progressive]+[posture]に特化したアスペクトマーカを3つの基本姿勢すべてに発生させ⁶、アスペクトマーカに特化したものと共存させている。このようにして5つの進行アスペクト体系が構成されている。

2.2.2 二重形[+progressive][−posture]

しかしこの2つの二重形は、その特徴である姿勢の意味を、さらに漂白した意味拡張を遂げている。そのうち1つは、すでに Nakagawa(2016)で報告された、(A7) *lùṛò* (<'lie'+'lie') が運動動詞 (motion verbs : 歩く・這う・泳ぐなど) と用いられた場合である。横になった姿勢で、移動することはできない。これは、例(28)のように、進行中の移動が話者の視点から「水平方向」になされていることを意味する。さらに、先にみた例(14)は、実は多義的で、例(29)のように、その動作が広い範囲で複数の主語によって行われていることも意味する。ここでも、動作が行われる範囲が水平方向に拡大されている。つまり、ここでは(A7)の'lie'は、[posture]から所在動詞において拡大されるような水平線上の空間認識へと意味拡張しているのである。この拡張された意味を[horizontal]と示す。

(28) ʔàri lùṛò !úù. 「彼らは(話者の視界を横切って)歩いている」

彼ら A7 行く

(29) ʔàri lùṛò lí=sà ṅlǎè. 「(あちこちで)彼らは歌を歌っている」

⁶ このような形式を発達させているのは、それを使用するためだとすると、グイ語の話し手は他の言語の話し手より「姿勢」を描写する頻度が高いのではないかという仮説をたてることができる。実際、同じ絵を見せてその解説をしてもらうというタスクを実施すると、グイ語の話し手は日本語の話し手より頻繁に姿勢を表現していると感じられる。この数量化は今後の課題である。

また、(A6) *cĩci* (<'stand'+'stand')を用いた例(13)も多義で、もう1つの意味は、「寝ないでずっと～している」である(例 30)。

(30) *ʔàri cĩci líi=sà ŋláè*. 「彼らは(寝ないで夜通しずっと)歌を歌っている」
別の例をあげよう。「雨」は当然姿勢をとることができない。

(31) *cúú=bi lùlò húū*. 「雨があちこちで降っている」
雨が A7 降る

(32) *cúú=bi cĩci húū*. 「夜通し雨が降り続けている」(A6)

(昨日の夕方から雨が降り始め、夜もやまずに降り続き、朝になった状態)

この 'stand' の、「立っている」という意味が同時に含意する「横になっていない・休んでいない」という意味が顕在化して拡張したと考えられる「休みなくずっと・(横になって寝ないで) ずっと起きたままで～する」という意味素性を[active]と(暫定的に)呼ぶことにする。

そうすると、グイ語の姿勢動詞を起源とするアスペクトマーカ―を、元になる姿勢動詞別に文法化の段階をわけて示すと表 2 のようになる。まず単純形は姿勢の意味を失い([-posture])、アスペクトマーカ―として文法化したものである(個々の分類には触れずここでは総称として[imperfective]としておく)。複合形も単純形と同様に考える。一方二重形は、意味的にはアスペクトマーカ―のもつ [-posture]と、もう1つの素性 [±posture]を重ねたものだと考えられる。2つめの姿勢の意味を保存したものの[+posture]はそれぞれ[stand]と[lie]を、拡張してなくしたものの[-posture]はそれぞれ[active]と[horizontal]を素性としてもつ。

表 2. グイ語の姿勢動詞の文法化

		'stand' <i>cié/cĩ</i>	'lie' <i>lóé/lùĩ</i>
単純形・複合形[-posture]		[imperfective] (A1)(A3)(A4)	[imperfective] (A2)(A3)(A4)
二重形	[-posture]	[imperfective][stand]	[imperfective][lie]
	[+posture]	(A6)	(A7)
	[-posture]	[imperfective][active]	[imperfective][horizontal]
	[-posture]	(A6)	(A7)

3. 今後の課題

本稿では、グイ語の姿勢動詞が三種類の意味拡張を経てアスペクトマーカ―の体系をつくりあげていることを提示した。意味拡張のあり方は所在動詞のそれとも深く関係するが、それについては触れることができなかった。所在動詞の体系的な調査はなされていないので、今後の課題である。

先に述べたように、これは進行中の調査の中間報告であり、現在実際の談話テキスト

上でこれらのアスペクトマーカ―および時制マーカ―の出現の事例を収集し分析しているところである。

謝辞

本稿は、2018年5月27日に日本アフリカ学会第55回学術大会（於北海道大学）で行った研究発表「カラハリ・コエ語派における姿勢動詞の文法化」で扱った内容の一部に加筆・修正したものである。この研究を実施するにあたって、資料の収集および学会参加については科研費（課題番号16H01925, 18K00582, 25580092）の助成をうけている。

本稿で扱ったグイ語資料はこれまで著者が集積したインタビュー・エリシテーション・テキストを利用したものである。調査に協力してくださったグイ語話者のみなさんと、すべての例の確認をしてくださったK.D.氏に感謝申し上げる。

参考文献

- Bybee, J. L., R. Perkins, & W. Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Güldemann, T. (2006) Structural isoglosses between Khoekhoe and Tuu: The Cape as a linguistic area. In: M. Yaron, A. McMahon, & N. Vincent (eds.) *Linguistic Areas: Convergence in Historical and Typological Perspective*: 99-134. Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Heine, B., T. Güldemann, C. Kilian-Hatz, D. Lessau, H. Roberg, M. Schladt, & T. Stolz (1993) *Conceptual Shift: A Lexicon of Grammaticalization Processes in African Languages*. Köln: Institute für Afrikanistik, Universität zu Köln.
- Kuteva, T. A. (1999) On 'sit'/'stand'/'lie' auxiliation. *Linguistics* 37: 191-213.
- Lemmens, M. (2005) Aspectual posture verb constructions in Dutch. *Journal of Germanic Linguistics* 17(3): 183-217.
- Maisak, T. A. (2005) Типология грамматикализации конструкций с глаголами движения и глаголами позиции (Tipologija Grammatikalizacij konstrukcij s glagolami dviženija i glagolami pozicii) (Grammaticalization paths of motion and posture verbs: a typology) Moskva: Jazyki slavjanskix kul'tur.
- Nakagawa, H. (2016) The aspect system in G!ui: with special reference to postural features. *African Study Monographs* 53: 119-134. Kyoto: Kyoto University.
- Newman, J. (2002) A cross-linguistic overview of the posture verbs 'sit', 'stand', and 'lie'. In: J. Newman (ed.) *The Linguistics of Sitting, Standing, and Lying, Typological Studies in Language*, 51: 1-24. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Vossen, R. (2013) Morphology: !Gana subgroup. In R. Vossen, (ed.) *The Khoesan Languages*: 207-214. New York: Routledge.